

哲学堂八景

出野尚紀

ideno naoki

0. はじめに

学祖井上圓了（以下円了）が創設した「哲学堂」には、あまり知られていないが、「哲学堂八景」と称される景観がある。これは、瀟湘八景を起源とするいわゆる「八景」ものの一つである。「八景」というタイトルから、瀟湘八景や日本各地の八景を真似て選定したものであると考えるかもしれない⁽¹⁾。

近年、日本各地に見られる「八景」について、国立環境研究所を中心に総合的な研究が行われ、『八景の分布と最近の研究動向』としてまとめられている⁽²⁾。このなかで日本国内外各地の八景についての考察がなされると同時に、日本国内における八景のリストが資料としてまとめられている。また、これを受けて行われた研究も発表されている⁽³⁾。「八景の分布と最近の研究動向」は、各地の自治体に問い合わせるという方法で、「八景」についての調査を行った⁽⁴⁾。しかし、この調査では、藤田・和田「まぢづくり」⁽⁵⁾、まぢおこし⁽⁶⁾としての「八景」——現代の八景を中心に——の本文中で「例えば、室町期の『博多八景』や浮世絵で有名な『飛鳥山十二景』が漏れている」⁽⁵⁾と述べているように、「洩れ」が生じたりしている。そして、円了が定めた「哲学堂八景」も「八景の分布と最近の研究動向」のリスト⁽⁶⁾から洩れている。

円了は、「哲学堂」の園内各地点に、「七十七場」と総称される哲学を学ぶために哲学用語を用いて、巡覧の目

安となるような巡礼地ともいえる名称をつけた。この「七十七場」のそれぞれ名称は、「精神修養的私設公園」(7)という「哲学堂」本来の目的を表す標識の意味を持つていえるといえる。そのため、昭和六十二年からの「哲学堂公園ルネッサンス整備事業」によって整備され、名称を記す石柱が建てられ、案内や看板も整備されている。しかし、「哲学堂八景」は、二〇一一年現在では、中野区立哲学堂公園内の案内や看板類に記されていない。

哲学館移転予定地の風景を示すものであった「哲学堂八景」が、哲学堂開園によってどのように変化したのであるか。本稿では、円了が、周囲の変遷によって移り変わる景観である「哲学堂八景」に、どのような意味を持たせようと考えたのかについて、選定した経緯や動機、そして、他の八景とくらべての特徴を考察したい。そして、本稿が、八景研究に一片の寄与を果たせば、幸いである。

1. 「八景」の概略

1-1. 辞書・辞典の定義

円了の「哲学堂八景」が一般の「八景」と異なる際立った特色を持つか、それとも、当時、共通して持っていた観念と一致するのかを考えるために、まず、国語辞書で「八景」をどのように定義しているのかを確認していきたい。これで現代の日本人が持つ「八景」の概念の代表としたい。

『広辞苑』では、「一地方の八つの景勝。中国の瀟湘八景におこる。日本では、これにならった近江八景・金沢八景などがある。」(8)としている。また、『大辞林』では、「八つのすぐれた景色。中国の瀟湘八景が起源。日本では近江八景・金沢八景などがある。」(9)とし、『大辞泉』では「一國、一地方などで特にすぐれた八か所の景色。中国の瀟湘八景に始まる。日本では近江八景・金沢八景・南都八景など」(10)とする。そして、『日本国

語大辞典』では、「ある地域で、特にすぐれた八か所の景色。中国の瀟湘八景にはじまり、わが国にも近江八景、南都八景、金沢八景、伏見八景、佐賀八景、明石八景、松島八景などがある。」(11)となっており、例として挙げられる地名が増えている。

中国が起源と国語辞典に記載があるので、漢和辞典でも調べてみたい。『大漢和辞典』では、「八つのよい景色。」とし、瀟湘・北京・近江・朝鮮半島の関東と四つの例が挙げられている(12)。

このように、辞書類では、「八つのよい景色を集めたもの」というように、読んで字のごとしのような字面の意味を説明している。そして、どれも起源を中国の瀟湘八景としており、日本にあるさまざまな「八景」はそれから派生したものとのことである。

1-2. 瀟湘八景とは

瀟湘八景の「瀟湘」という地域は、広西省に源を発した湘江(湘水)が、途中で瀟江(瀟水)に合わせて湖南省を北に流れ、洞庭湖に注ぐ、その下流域一帯を指すという(13)。

具体的に瀟湘八景とは、次の八つを指す。

- 一、平沙落雁
- 二、遠浦帰帆
- 三、山市晴嵐
- 四、江天暮雪
- 五、洞庭秋月
- 六、瀟湘夜雨
- 七、烟寺晚鐘
- 八、漁村夕照(14)

ここで、「瀟湘夜雨」と「洞庭秋月」と地名が入っている(15)。瀟水と湘水の流域では範囲が広く、また、洞庭湖は琵琶湖の数倍の広さを持つ巨大な湖であったため、「瀟湘」や「洞庭」という語だけで具体的な一点を指すことは

難しいと思われる。

「瀟湘八景」の形成には、漢詩と絵画という二つの流れがある。五世紀南北朝時代劉宋の詩人柳惲や、その後の齊の詩人謝朓の時代以来、長江に注ぐ洞庭湖の景色は、戦国時代楚の屈原の故事などから、詩題として風景詩のなかで詠われている(16)。唐の時代から八景は選定され続けているという(17)。絵画表現としては、十一世紀北宋の文人画家宋迪が八景を見立ててたことが始まりという。北宋の沈括は宋迪が「瀟湘八景」を定めたと言及しているが、はじめから八景を選定しそれを画いたのかは疑わしく、逆に八つの画題から「八景」と定められた可能性がある(18)。

元代には、大都(現在の北京)など他の地域でも「八景」を定めるようになった(19)。また、韓国には、十二世紀に伝わり、十五世紀に広まったが、その後忘れられたという(20)。

1-3. 日本における八景の受容

日本に「八景」がもたらされたのは、禅僧の交流を通してであると考えられる。

いつ詩や画が日本に伝来したのかは明らかではないが、詩については、禅僧大休正年念の『念大休禪師語録』にある「瀟湘八景詩」が、一番古い時代のもとのされ、画については、牧谿、玉澗、夏珪と張芳汝の「瀟湘八景画」が一番古い時代のもとのされる。室町時代までの瀟湘八景は、画は大名や貴族の賞翫物として存在し、製作は中国画の模倣が中心であった。そして、その画にたいして詩作を行った(21)。しかし、日本においてこの室町時代までに、鎌倉時代に三箇所、南北朝時代に一箇所、室町時代までに一箇所の計五箇所の選定が行われたという(22)。

江戸時代になると、後陽成天皇の意向が間接的ながら作用して、近衛信尹により現行の近江八景が選定されたという。ここで天皇の権威による不可変性をともなって、水墨画が画かれ、歌が添えられた(23)。

その後、参勤交代の制度や参宮などのために、知識階級が多く日本国内を移動するようになったこともあり、江戸時代には、現在まで残る「八景」が多く選定されるようになった。そして、明治時代になると、さらに多くの「八景」が選定された(24)。

このような時代のなかで、近江国の琵琶湖南部の景観である近江八景や、武蔵国最南端の金沢八景は、多くの紀行や遊山で訪れられるようになった。また、浮世絵師鈴木春信は「座敷八景」を発表し、屋内のみで完結する「八景」を画いた。江戸時代後期には、多くの人が訪れる景勝となったり、多くの人が買うことができる作品が発表されたりしたので、庶民にも「八景」というものが知れ渡っていたと思われる。

日本で選定された「八景」には、景物の面から、瀟湘八景を模した抽象的な地名と景物の組合せ。近江八景のような具体的な地名(地点名)と景物の組合せ。さらに、具体的な地名と瀟湘八景から変化した景物を組み合わせたもの。具体的な地名だけのものというように区別ができ、瀟湘八景から変化した景物は変化したものが一つから全てまでの幅がある。この景物の変化は、日本の多くの地域で「八景」が選定されるようになる。瀟湘八景」と同じような景観がないところでも、景物を選ばなくてはならなくなるためである(25)。また、数についても「八」以外に、「十」や「十六」など数に増減がある(26)。

そして、元号が平成になっても、「八景」の選定は続いている(27)。

2. 八つの景観の分類

「八景」の景観を表す下部の二字について述べていきたい。この二字の解釈については、上部の場所を表す部分にたいして、変化の割合から、「八景」から「八景もの」への移ろい。語を変えることによる景観にたいする選定者の考え方の変化などが読み取れる部分である。そこで、鈴木信宏「東京の八景・江戸八景にみる移ろいとその構造」(28)を参考に、解釈を見ていきたい。ただし、「瀟湘八景」の順番に順序を変えた。

晴嵐は、春もしくは秋の日中に見られる山中の冷え冷えとした空気の意味である。ただし、初夏の薫風を意味する青嵐との混同から強風を表現した作品も多く、また嵐の後の穏やかな晴れ間(風の状態)という解釈の作品もある。

晚鐘は、沈む夕陽を背景に、山中にある寺、または、遠くにある寺の鐘が聴こえてくるという景色である。

夜雨は、季節を問わないが、夜に降る雨の景色である。周りの音を掻き消すような雨音も観賞の対象である。日本では、とくに広重において、夏の夜の雨として画かれているのが見られる。また、白居易の「長恨歌」にも夜雨は詠われている。

帰帆は、夕暮れ時に、一斉に港へ帰る帆掛け舟の景色である。

秋月は、秋に上空の月と水面に反射する月明かりとを観賞する景色である。西側から東の空の月をとらえる場合が多い。

落雁は、広がりのある空間に飛ぶ雁と鳴き声を観賞する景色である。空から舞い降りてくる雁を指す場合もある。

暮雪は、夕暮れ時、または、日没後の雪をいただいた山を望む景色である。降る雪よりも、晴れた日に、積

もった雪を觀賞する場合が多い。

どれも、時間は一日の終わりに近く、人が集まる市街のような場所よりも、農村や人里離れた場所の風情をいうものである。

ただし、日本では、山紫水明的な美しさを表す表現であるとして、「八景」を選定しているように思える。江戸のさまざまな八景も、農漁村風景である「瀟湘八景」とは逆説的に、都市である江戸という町のなかに、そのような都市的喧噪を離れた場所を選び、描きだしているように思える。そして、秋と冬の景色であったものを、「晴嵐」を「青嵐」のような初夏の風景とし、「夜雨」を真夏の夜の雨ととり、「落雁」を、冬鳥である雁が春に北へ帰るところとして、一年中にする場合もある。

3. 円了と「八景」

円了が「八景」を、いつ、どのように知ったのかについては、残念ながら判らない。『東洋大学百年史』に収められている「読書録」に八景をきちんと記すような文献は見られない⁽²⁹⁾。また、『哲学堂図書館目録』⁽³⁰⁾に記載されている書籍リストには、『江戸名所図絵』や『東海道名所図絵』といった金沢八景や近江八景に言及する文献が記されている。しかし、円了自身が、近江八景や金沢八景の光景のすべてをその目で見たことは確認できなかった。例えば、「南船北馬集」のなかで日本の八景に訪れたことが記されているのは、大正三年（一九一四年）三月二十二日に、近江八景のなかで「瀬田夕照」と挙げられる瀬田の唐橋を通ったというものだけである⁽³¹⁾。このほかにも何度か滋賀県を訪れているが、近江八景については見られない⁽³²⁾。「南船北馬集」には、公的な講演旅行のほかに、夫人と伊勢、京都を旅した「関西漫遊日記」のような私的な旅行記も含まれているが⁽³³⁾、私

的旅行で八景を見物したものは見つけれなかった。

円了は、第二回海外視察の途中、イギリスのロンドンで田舎行きを希望したため、好本督のオックスフォード大学時代からの知友アーノルド・フォスターが所有していた、リーズ市(Leeds)郊外の田園地帯にあるバルレー村(バーリーBewley)に建つ、バックレー氏邸に明治三十六年二月十二日から三月十一日までの約一カ月、滞在した(34)。そのさいに都市の外縁部である「郊外」というものの景観に興味をもつたのではないだろうか(35)。また、第三回海外視察の報告書である『南半球五萬哩』のなかに、派生型八景である「南半球十二勝」という十二の詩句が挙げられている(36)。

一、木曜鳥暁嵐 二、珊瑚州秋濤 三、志度尼汽笛 四、米留盆落葉(37)

五、奈達灣冬月 六、喜望峰暮烟 七、伯刺爾珈園 八、亜然丁牧田

九、羅浪江春帆 十、安天山夏雪 十一、摩世闌夜雨 十二、三舍巷午雲

その他にも、円了は、明治四十四年に発刊した『日本周遊奇談』のなかで、「八景」をいくつか選定している。北海道を東西に分け、「八景」を選定し、十六景のそれぞれに七言絶句の漢詩を付している。

一、大沼晴嵐 二、軽川夕照 三、余市果林 四、小樽汽笛

五、雷電断崖 六、利尻岳雲 七、羽幌夜雨 八、宗谷秋月

これが、西八景である。軽川は今の手稲でその夕映えをいい、果林は果樹林のことであるので、リング園であると思う。また、余市では余市八景が明治十年に選定されている(38)。

一、根室観漁 二、厚岸尋寺 三、釧路橋影 四、十勝棹声

五、石岳暮雪 六、神溪秋曉 七、浦河翻濤 八、登別沸泉(39)

こちらが、東八景である。尋寺は、紀行作家宮脇俊三が『最長片道切符の旅』のなかで訪れた蝦夷三大寺の一つ国泰寺であろうか⁽⁴⁰⁾。橋影として川面に映るのは、幣舞橋のことであると思われる。掛け替えられた四代目の幣舞橋は、昭和四十年に選定された釧路十景に選ばれている⁽⁴¹⁾。石岳は石狩岳を指す。神溪は、旭川の西にあり、空知支庁と上川支庁との境界になっている神居谷をいう。

円了が「種々苦心の結果」と述べているので、訪れた場所から「八景」を選定しようとしたが、数の面から、後接する語の面からの両方で納得するようにまとめられなかったようである。晩鐘、落雁、帰帆を付す場所を選ぶことはできなかった。そこで、寺に関連するものとして、晩鐘の代わりに尋寺を入れているのだろうか。能登を巡講したときに經由地から能州八景も選定している。

- 一、七尾の汽笛
- 二、中居の隧道
- 三、珠洲の塩田
- 四、南志見の盆踊り
- 五、輪島の名月
- 六、七浦の断崖
- 七、鈍打の驟雨
- 八、高浜の炎暑⁽⁴²⁾

なお、円了が参考としたかどうかはわからないが、江戸時代末期に七尾八景が選ばれている⁽⁴³⁾。

さらに、『日本周遊奇談』のなかで、「八景」だけではなく、「七不思議」も選んでおり、諏訪の七不思議を昔からの諏訪の七不思議を聞いて新たに選んだり、島根、鳥取両県の七不思議、北海道、琉球の七不思議を述べた⁽⁴⁴⁾。

このようなものを編むところからも、円了に八景にたいする親近感が窺えるのではないだろうか。

4. 哲学堂八景の景観

哲学堂八景は、明治三十七年九月に発行された『東洋哲学』のなかに収められている「哲学堂の記」が公に

なつた始まりである(45)。この明治三十七年九月は二月に日露戦争が開戦しており、勝敗が定まっていない時期であるということ、を頭の隅に入れておかなければならないだろう。文が書かれたのは哲学堂、現在の四聖堂(以後、建物としての哲学堂は現称である四聖堂とする)が、内装の意匠まで完成した直後のことであろう(46)。そして、「四聖堂の天井」について「四聖堂の内容」の他に特別に項目を立てて説明している。それは、「物心を代表せる燈明と香爐との上に、銀色ガラスの天井を張り、其中央に半球の金色ガラスを挿入した、(略)球燈は金球より直下し、角爐は銀色ガラスの周邊より垂下する」(47)という天井の意匠に時間がかかったためであろうか。この現在は失われた鶏卵宇宙説に範をとつた照明の構造が、とくに根本に想定した宇宙生成と宇宙の構造を説明する重要な装置であつた。

円了の「哲学堂の記」に記される順序に従つて、「哲学堂八景」を列挙したい。

- 一、富士暮雪
- 二、御靈帰鴉
- 三、玉橋秋月
- 四、氷川夕照
- 五、薬師晚鐘
- 六、古田落雁
- 七、鼓岡晴嵐
- 八、魔松夜雨

瀟湘八景と合わせて記せば、表一のようになり、記載の順序がまったく異なっている。

表一 瀟湘八景と哲学堂八景の比較

瀟湘八景		哲学堂八景	
一	平沙落雁	六	古田落雁
二	遠浦帰帆	二	御靈帰鴉
三	山市晴嵐	七	鼓岡晴嵐

四	江天暮雪	一	富士暮雪
五	洞庭秋月	三	玉橋秋月
六	瀟湘夜雨	八	魔松夜雨
七	烟寺晚鐘	五	薬師晚鐘
八	漁村夕照	四	氷川夕照

※数字は記載の順、瀟湘八景の順に合わせた

「哲学堂の記」は、四聖堂を建てた場所の立地を示す文章である。まとめられたのが哲学館退隠前であり、哲学館大学移転予定地であるという前提のもとに、その立地の景観をまとめたものとして哲学堂八景が挙げられている。そして、その景観については、以下のように記されている。

本堂は乾坤巽艮の隅位に向ひて開き、溪谷に臨み丘陵に対し、遠近の風向頗る佳なり、其西南面には遙かに富士の雪峯の卓然として樹頭に秀出するを望む、其東南面には溪谷あり、之を斜断せる小流あり、其名を玉川と呼ぶ、玉川上水の分流なりといふ、之に駕したる小橋あり、其通称は四村橋なり、蓋し四ヶ村の境界に当れるによる、然るに更に雅名を下して玉橋となす、是れ玉川橋の略なり、此溪谷を隔て玉橋より右方に亘り一帯の高原と相対す、之を鼓ヶ原（鼓岡）と称す、昔し和田の居城ありし時に此原頭にて鼓を鳴らして練兵をなしたりといふ、是れ其名の由来なり、堂の東北面には竹林あり、其地名を葛ヶ谷と称す、竹林の右方に杉樹の並列せるあり、是れ社林なり、其中に老杉の鬱然たるあり神木を以て称せらる、其社を御霊社と名く、神功皇后を祭る所にして、葛ヶ谷の鎮座なり、此社林と玉橋との中間にして稍右方に当り数丁を隔てたる丘上に老松古

杉の高く並立せるを見る、是れ又御霊社なり、之を中井村の鎮守とす、もと葛ヶ谷の本社より分立したるものなりと伝ふ、其右方に一個の煙突の高く聳ゆるあり、是れ落合の火葬場なり、是より更に右方に当り遙に二個の煙突の樹間に並列するを望む、是れ淀橋水道の工場なり、堂の西北面には茅屋数戸ありて散在す、之を東村と称す、其左方に当り田圃の間に校舎の伏在せるを望む、是れ江古田尋常小学なり、其右方の背面に当り茂樹の鬱葱たるあり、之を氷川の社林とす、是より東南面の玉橋に至るの間はすべて江古田と称す、而して其間の小部落を片山と呼ぶ、江古田村の一部なり、和田山も東村も共に江古田に属し、葛ヶ谷、中井は落合村に属す、和田山と片山との間にありて玉川の溪流に傍ひたる一帯の水田を飯に古田と名く、其名を江古田の村名に取るなり、江古田および鼓岡を隔て、新井村あり、村内の薬師は衆人の帰依する所なり、其距離僅に数丁に過ぎざれども、樹木の為に遮られて見ることを得ず、但し其鐘声は朝夕林を穿ちて聞ゆ、堂の西方数間を離れて一帯の松林あり、其中に孤松の佇立するあり、之を俗に和田山の天狗松と呼ぶ、往時人ありて此松を伐らんとせしに、天狗の為に妨げられて果すことを得ざりきといふ、之を宜く妖松又は魔松と名くべし、此魔松と御霊社の老杉とは東西数十町を隔て、猶ほ見ることを得、是れ実に哲学堂の目標なり。

これから考えると、富士暮雪は、四聖堂の軒先から西南方に望むことができ冬のを被って白い富士山がみえること。御霊帰鴉は、葛谷御霊神社の社林に住み着いているカラスが夕方に帰ってきて、木々の上を飛んでいる光景。玉橋秋月は、四つの村が近くに存在することから名づけられた妙正寺川に架かる四村橋とその上に架かる月をいう。なぜ玉橋という賀名がついているかという、妙正寺池に湧き出す水を水源とする妙正寺川や少し上流で妙正寺川に合流する江古田川に、玉川上水の分流である千川上水から取った用水路の水が注いでいるた

め、多摩川の水が流水の一部をなしていることから「玉橋」と命名した。氷川夕照は、江古田氷川神社の方向の社林が、夕陽を反射して輝くように見えることから、命名した。江古田氷川神社のほかに西南方には、太田道灌が江古田沼袋が原の合戦の際に杉を植えたとされる、沼袋氷川神社がある。しかし、この神社は哲学堂に関するものからは窺えない。薬師晩鐘は、西南西に一キロメートルほど離れた新井薬師梅照院で朝夕に撞かれる鐘の音が晩方に聞こえてくることである。古田落雁は、江古田川と妙正寺川が流れる丘下の氾濫原一帯が水田となっている。秋の稲を刈り取った後の時期に、その上を雁が隊列を組んで飛んでいたり、降りたって餌を求めていたりする光景である。鼓岡晴嵐は、江古田の荘園地頭であったという和田義盛が、今の哲学堂の地に屋敷を構え⁴⁸、南側の丘で兵士の演習を行ったという言い伝えによる。「鼓岡」という地名も、その演習で太鼓を叩いて指示をしたということにあるという。その丘が晩秋の冷え込みで寒々しいときに山気が立ちのぼる光景をいうと思われる。魔松夜雨は、四聖堂から十数メートルのところを生えていた、伐ろうとすると呪われるという伝説を持つ、樹齢約二百年という大松に、時雨の雨粒が音もなく降り注いでいる光景をいうのであると思われる。それとも、夏の夕立や台風などの時間水量が多い雨の水滴が松の梢を叩いている音が聞こえる、という光景を指しているであろうか。

選定当時の哲学堂付近の様子について、明治四十二年測図の地図に、八景に關係する「鼓岡」と「一带古田」の名称を足し、傍線を引いたものを、図一に掲げる。

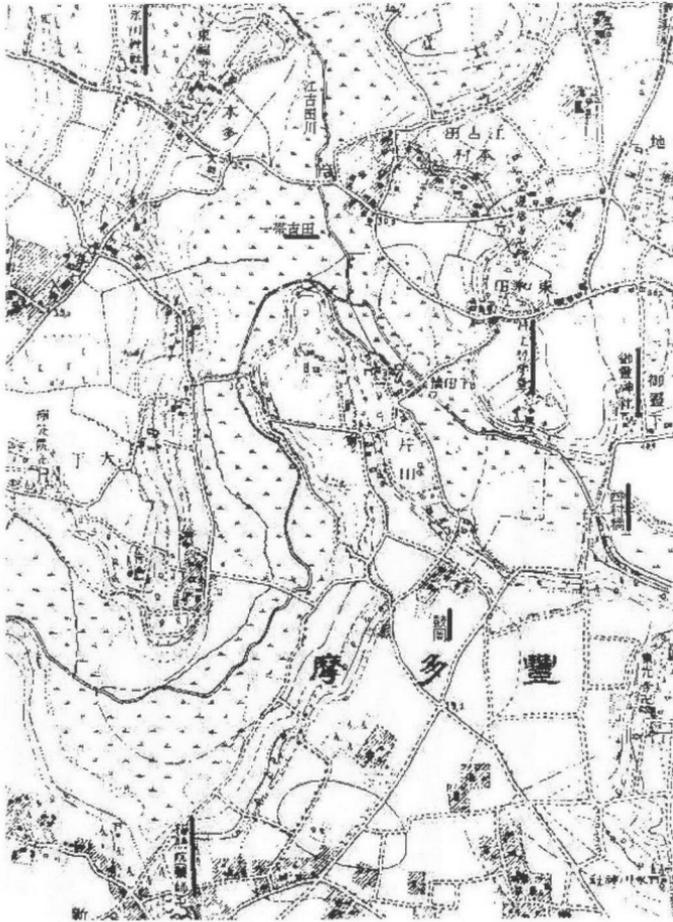


図1 明治四二（一九〇九）年哲学堂付近（『東京都市街図2 東京北部』柏書房、一九九六年）

この他に哲学堂八景に関して述べたものは、「哲学堂の記」をのぞくと円了自身による「哲界一瞥」（49、「哲

学堂の由来」、「哲学堂案内」(50)、そして、前島康彦の『哲学堂公園』の四点のみである。参考のため、ここでこれらの内容を確認したい。

「哲界一瞥」(51)、「哲学堂の由来」(52)は、記載をしているけれども、八景の名称を列挙するだけである。そして、『哲学堂案内』でも同様に名称が列挙されているのみであるが、末尾ということもあり景観を詠んだ漢詩が続いている。

庭外の風景に就きて八景を設けてある。

- 一、富士暮雪
- 二、御靈歸鴉
- 三、玉橋秋月
- 四、氷川夕照
- 五、薬師晚鐘
- 六、古田落雁
- 七、鼓岡晴嵐
- 八、魔松夜雨

右の説明は餘り煩はしければ略して置く、但し庭内の風致に就きてに余の所吟が數十首ある、此に拙劣ながら五六首掲げて跋文に代へることにしませう(53)。

そして、これに続いて、七言絶句が三つ、五言律詩が五つ、七言律詩が一つ掲げられている(54)。

また、前島は、以下のように記しており、三浦節夫「井上円了と哲学堂一〇〇年」でも同じ部分を引用している(55)。

哲学堂の西側妙正寺川を隔てた向う側は旧片山村で雑木が茂り、疎林の上に富士山が眺められた(富士暮雪)。御霊神社は道路を隔てて園地の東側にあり、昭和十二、三年頃までは老杉がそびえ、ねぐらを求める鴉

が集まった（御霊帰鴉）。

妙正寺川は玉川の分水と考えていた円了博士はこれを玉溪と称していた。従つてその川に架かる四村橋（園の東南端）を「玉橋」とよんだのであり、ここでの名月は美しかった（玉橋秋月）。

夕陽は氷川神社（江古田の総鎮守、今の江古田二丁目）の杜にせずみ（氷川夕照）、名高い新井薬師梅照院（新井五丁目）の夕暮の鐘（薬師晚鐘）がきこえる。

「古田」は江古田の田圃の略で、旧江古田村の田圃には秋になると雁がわたり（古田落雁）、旧片山村の丘陵を鼓ヶ丘とよんだが、その晴嵐は颯々として快く（鼓岡晴嵐）、そして園内にあった「魔松」（天狗松）には静かに夜の雨がそそぐ（魔松夜雨）。（56）

内容面について言うと、この前島の説明は、「哲学堂の記」を簡単にまとめたものである。

円了は、「哲学堂八景」という景物すべてを詩題とした漢詩を詠んではないが、詩のなかに、地名や景物を讀み込んだ哲学堂についての漢詩をいくつも作っている。

野方村盡處、丘上設仙莊、天狗松陰路、幽靈梅畔堂、汲泉朝煮茗、掃席晚焚香、入夜裁詩句、閑中自有忙（57）

（野方村の外れ土地に、丘のうえに仙人の住まいを建設した、天狗松が影をつくる道、幽靈梅のそばのお堂、泉で水を汲んで朝になったらお茶を煮だす、座敷を掃いて晩方になったら香を焚く、夜になったら漢詩をひねる、閑暇があるなかでも自然と忙しい）。

無客門常鎖、菜畦路稍道、洗心玉溪水、養氣鼓岡風、醉處吾忘我、吟邊色即空、俗塵渾不到、靜坐守仙宮⁵⁸
(客が来ないのでいつも門を閉ざしていても、野菜畑の間に畦道が通じている、玉溪を流れる水は心を洗うように澄んでいる、鼓岡に吹く風で気を養い、私は酔っぱらっては我を忘れる、吟ずる境地は色即空であつて、俗界の塵はまったく寄りつかない、静かに座つて仙人の住まいを守っている)。

野外風光未見冬、何知雪色到遥峰、夕陽影裏秋如畫、天壁高懸白玉蓉(これ哲学堂八景中の富士暮雪を詠じたるなり)

(野外のおもむきにはまだ冬のきざしも見えないのに、なんと雪がはるかな峰をいろどっているのが知られる。夕日のひかりのなかに秋は画のごとく、天空に白雪の富士がかかっているのである)⁵⁹。

円了は、哲学堂でいくつも漢詩を作っているが、哲学堂八景を土地の景観を暗示する語から詩題へと変えようとしたことはあつたのではないだろうか。しかし、四聖堂を建てたときから十年余りの間に、円了自身の意識の変化があり、景物すべてには漢詩を作らなかつたと想像する。

円了が読んでいたかはわからないが、明治三十一年一、二月に『国民之友』のなかにおいて、国木田独歩が「今の武蔵野」という題で『武蔵野』を発表している⁶⁰。ここでは、独歩が、明治時代中期の武蔵野において「美」と感じた景観が記されている。円了が哲学堂のある野方の地に感じた情趣についての比較という観点から簡単に述べたい。

独歩は、武蔵野の地理的な範囲は、多摩川と隅田川⁶¹を中心に神田川流域や玉川上水といったものが流れて

いるところと記している。落葉広葉樹の林が特色であり、春の新緑、春夏秋冬それぞれに、霞、雨、月、風、霧、時雨、雪といったものに趣が感じられる。川沿いの低地には水田があり、丘陵は畑と林となっていて、それらが混然と入り交じっている。また、軍隊の演習の音が聞こえるのも勇壮な良いものであるとしている。雪を抱く富士山に夕陽が沈むときに雲が黄金色に染まる風情もあげている。武蔵野は富士山に代表される西の山々だけでなく、そのなかに東京という都市を内包しているところにも素晴らしさがある。そして、都市とも田舎とも言えない郊外という中間的なところであるから、「大都會の生活の名残と田舎の生活の余波とが此処で落合って、緩かにうづを巻いて居るように思はれる」と、どちらにも属するという両属性が持つあやふやさ、フアジーさといったものに情趣を求めている(62)。

これらに見られる景觀は、作庭家の岡田憲久の庭園造作にたいする意見を借りれば、「自然豊かな国土は多くの恵みをもたらし、そこで育まれた日本人は、何時も自然を畏れ敬ってきた。身の周りに自然の断片をさまざまなかたちでもち込むことにより、自然といつも共にあろうとし、自然への思いを表し、自然を通してその奥にものごの本質を感じ取ろうとしてきた」(63)という日本人の思いについては円了にも共通することが、この哲学堂から詠んだ詩句に読み取れるのではないだろうか。

5. 哲学堂八景の現状

前島の『哲学堂公園』が出版されてからも三十年以上の月日があるので、哲学堂八景の現状を確認しておきたい。

富士暮雪は、開園から百年以上の歳月の間に哲学堂公園内の樹木が生長していることもあり、園内でも高所に

ある三学亭や六賢台からでもそれとわかるように、富士山を望むことができない。ただし、近辺の開けた地点や旧野方配水塔の上からであれば、白山の東洋大学から同様、現在でも望むことはできるだろう。

また、中野区のホームページにおいて、昭和十年代に絶対城の上から撮影されたと思われる富士山をのぞむ写真を閲覧することができる(64)。

御霊帰鴉は、葛谷御霊神社が、建物は明治時代のものとは異なっているが、道を隔てて相對している。御霊神社は拜殿が東向きであり、哲学堂に背を向けている感じになっている。けれども、明治四十二年の地図では、まだ間の道が通っていないこと、御霊神社から東に拡がる落合地域にあった旧葛ヶ谷村の鎮守であったことから、当然のことといえる。そして、社林という規模ではないが、何本かの杉の大木が境内東側に生えており、境内に影を落としている。そして、東側には、昭和六十一年に新宿区の有形民俗文化財に指定された力石が六つ置かれている(65)。また、西側にも樹が生えている。

玉橋秋月は、哲学堂の拡張により、哲学堂公園の南東側入り口に接するようになった四村橋が架かっている。妙正寺川の護岸工事や掘り下げ工事が行われ、明治のころとは橋の光景も随分と変わっているだろう。

氷川夕照は、昭和三十年代まで水田であったところも住宅に変わっているが、江古田氷川神社は変わらずにあり、七百年続く祭事である江古田獅子舞が今でも行われている(66)。また、神社北側の国立中野療養所は、江古田の森公園へと変化している。

薬師晚鐘も、新井薬師梅照院が変わらずにあり、徳川秀忠の五女東福門院和子のガング病を治した眼病に効く薬師仏であると信仰を集めている(67)。ただ、夕方に撞く鐘の音は都市化が進んだ現在ではまったく聞くことが出来ない。

古田落雁は、哲学堂公園の西側で合流する妙正寺川の支流である江古田川が、護岸工事などにより、昔氾濫をしたとは信じられないほど小さな流れとなつて流れている。

鼓岡晴嵐は、昭和時代に工場が建つていた妙正寺川対岸の低地には、遊水池を兼ねる少年サッカー場とマンションが建ち、その南側の丘上は、立錐の余地なく住宅が建ち並んでおり、練兵に適した土地であつたとは想像できない状況である。

魔松夜雨は、天狗松は、昭和八年に枯れたため伐採され、現在は跡のみが残っている(68)。

6. 哲学堂における八景の意味

まず、「瀟湘八景」の八光景とは、立地面から帆掛け舟が遡航することができないので、港に戻る船を歌う帰帆の代わりに、ねぐらに帰るカラスを歌う帰鴉を入れていところが異なる。この帰鴉以外の状景は一般的な八景が持っているそれぞれのイメージと合致している。

四聖堂だけからの哲学堂八景では、座敷において感じる景観である。

哲学堂八景は方角の面から、四聖堂の四方正面のそれぞれから場所を見ることができただろう、東側の御霊帰鴉、南側の鼓岡晴嵐、西側の富士暮雪と魔松夜雨という風景がある。そして、場所を直接目にできない南方の玉橋秋月と葉師晚鐘、西方の氷川夕照と古田落雁という二つずつの状景と分類できる。四聖堂という一点から感じられる周囲の状景を表したものであるといえる。また、東西にある御霊神社と氷川神社という二つの神社、東に生える御霊神社の杉と西の哲学堂の松という二種の植物という二組の対がある。南方は、川を隔てて見える鼓岡と音のみが届く葉師、西方は、川沿いに拡がる古田とすぐ十数メートル近さの魔松と対になつていて、「川」を

対象にいれていながら、もう一方の遠近を変えるという変化を持っている。

瀟湘八景の「夜雨」は、全体が秋から冬の景観である。しかし、清少納言が『枕草子』において、雨は出ないが、「夏は夜」として「雨など降るも」と書いているので、日本古典的な感覚では「雨の夜」というと夏であったと思う。円了は、十一月頃の夜に降る時雨の幽玄さを言いたかったのだろうか、それとも、雨音も高い夏の夜の雨を言いたかったのだろうか。円了の記述からでは判断がつかない。ただし、博識な円了のことであるので、瀟湘夜雨が冬の状景であると知っていて、冬の状景として選んだものであると信じたい。

そもそも哲学堂の地を購入したときは、まだ最寄りとなる駅が目白駅であり、そこから、二十四、五丁（約二、四キロメートルから二、五キロメートル）の距離があり、人力車の利用が可能であるとまで記している⁶⁹。この明治三十七年の「哲学堂の記」には、一キロメートル弱近い中野駅からの行路はしるされていない⁷⁰。そして、『哲学堂案内』では、道程が五つに増えている⁷¹。この駅からの距離に、哲学堂八景の選定には、とくに人力車のことまで記していることから、土地の高雅さとは裏腹な不便さがない交ぜになっている感じを受ける。当初の哲学堂八景は、学校移転予定地として、遠近の風景がよく精神修養に向いていることを説明する文句であった。その後、哲学堂に七十七場が整備されてくると、自らを研鑽できるところであるが、思索などをしなくとも、居ながらにして八景を感じられる、訪れるべきところであるという宣伝文句に変化していく。これは、学校予定地と私設公園という場の目的の違いにより「哲学堂八景」というものが果たす役割が変化したためであると考えられる。

7. まとめ

前島は、哲学堂八景を「大正初期の哲学堂周辺の田園風趣を遺憾なく示すもの」(72)と述べている。ただし、選定時期は、それよりも二十年近く前の明治三十七年のことである。しかし、昭和中期まで田園が残っていた江古田地域であるので、現在の西武新宿線が通っていない大正初期になっても、選定した明治三十七年と景観はほとんど変わっていないと言える。富士山を望むことができるなど、東京の郊外地域として典型的な場所であるが、それでも情趣を感じさせる景観を保持していたということがいえる。

哲学堂八景は、四聖堂という一つの建物のなかから感じられる景観であるということが、具体的であろうが抽象的であろうが、八つの別の場所から感じる状況を数えあげる、風景について定めた、多くの八景と異なるところである。それが、哲学堂へと場が拡がると、場内名勝である魔松夜雨と借景であるほかの七つの景観へと空間的な変化が見られるが、同じように感じられる景観であった。

円了は、勝海舟をはじめとする華族階級との交際を持っていたが、自身は巷間にある一庶民でありたいと、常々考えていた。そこで、哲学館大学学長を退隠した後、哲学堂主として、民間にあつて広く国民を啓蒙する活動を行い、また、精神修養的公園として四聖堂を整備発展させた私設公園を作ろうとした。哲学堂の地を、自らの隠居所として専有するよりも、この先長くに渡って多数の人々に訪れてもらい、心の研鑽を積んでほしいという思いがあった。そこで、それまでの哲学堂を四聖堂と改称し、他に模範となるような教育的、倫理的、哲学的に優れた人を顕彰する建物を建てた。また、哲学用語を付した場所名をつけ、人々に哲学に親しんでもらい、その場所所において「人間とは何か」という問いを考察することで、品格が高まることを期待した。そのような公園に、借景として、「哲学堂八景」の景色を取り入れることで、平安時代から鎌倉時代までの座敷から庭を見

る形である一点集中型と、室町時代以降の園内を周遊する形の回遊型の両方を、見所として兼ね備えている。また、立地が妙正寺沿いの渓谷部分の唯物園・唯心庭と丘上の時空岡に別れ、その間を趣向が様々な本もの通路が結んでいる。四聖、六賢、三学、三祖という哲学者・思想家として顕彰すべき人々が祀られている。農村が拡がる東京の西郊に民間の手によって作られた、誰でも訪れることができる場所としてアクセントの役割を果たしていた。

【注】

- (1) ほかに名数と関連する見るべきものの集積として、「七不思議」がある。紀元前二世紀にフィロンが書いた「世界の七不思議」や、円了の出身地である現在の新潟県に関連する越後七不思議、親鸞上人七不思議（日立システムアンドサービス編『マイペディア電子辞書版』、日立システムアンドサービス、二〇〇六年）、そして、東京で有名な本所七不思議があるけれども、これらについては、記載を見ていない。
 - (2) 青木陽二、榎原映子編『八景の分布と最近の研究動向』国立環境研究所研究報告、No. 一九七、国立環境研究所、二〇〇七年。
 - (3) 石立裕子、綿坂豊昭「日本で選定された「八景」の景物について」『図書館情報メディア研究』七（二）、『図書館情報メディア研究』編集委員会、二〇一〇年、三十三～三十九頁。
 - (4) 榎原映子「日本の八景データ」、青木陽二、榎原映子編『八景の分布と最近の研究動向』、百六頁。
 - (5) 藤田洋治・和田康一郎「まちづくくり」「まちおこし」としての「八景」——現代の八景を中心に——『東京成徳短期大学紀要』第四二号、東京成徳短期大学、二〇〇九年、百五頁。
 - (6) 榎原映子「日本の八景データ」、百八～百四十五頁。
 - (7) 井上円了「哲学堂の由来」『井上円了選集』第一二巻、東洋大学、一九九七年、五百六十頁。
- 円了が、哲学堂を公園とすることについて、感化を受けたかどうかの判別つかないが、幸田露伴は、明治三十二年

に書いた『一国の首都』のなかで、「公園は都府の肺臓」、「精神上の鬱抑を医し」、「精神の洗濯場」と公園の効用を述べている。そして、空間が拡がり草木が繁っている公園は、「人民をして空気と光線との妙作用を味はしめ、公園内の散策逍遥を以て労を医し気を養ふことの最も経済的にして最も衛生的に、また最も道德的なることを覺らしむるは、実に都府の有すべき設備として欠くべからざるの設備たる」として、上野公園と芝公園のほかに、東西、中央にもう一つずつ気を養う公園を持つべきと主張している（幸田露伴『一国の首都』、岩波文庫、頁百二〜百九）。

(8) 新村出編『広辞苑』第六版、岩波書店、二〇〇八年。

(9) 松村明編『大辞林』第三版、三省堂、二〇〇六年。

(10) 小学館『大辞泉』編集部編『大辞泉』増補・新装版、小学館、一九九八年。

(11) 日本大辞典刊行会『日本国語大辞典 縮刷版』第八卷、小学館、一九八一年。

(12) 諸橋轍次『大漢和辞典』縮寫版 卷二、大修館書店、一九七六年。

(13) 芳賀徹「風景の比較文化史——瀟湘八景」と「近江八景」『比較文学研究』五〇、東京大学比較文学會、一九八六年、四頁。

(14) この瀟湘八景の順番は、沈括の『夢溪筆談』に記される順番である。論文によってこの順序は一定していない。

(15) 張小鋼「浮世絵に映る瀟湘八景——江戸時代における日本人における異文化受容の空間意識」『金城学院大学論集』人文科学編第四巻第一号、金城学院大学、二〇〇七年、三十六頁。

(16) 芳賀徹「風景の比較文化史——瀟湘八景」と「近江八景」五頁。

(17) 青木陽二、榊原映子「八景の伝播と分布」、青木陽二、榊原映子編『八景の分布と最近の研究動向』、十三頁。

(18) 芳賀徹「風景の比較文化史——瀟湘八景」と「近江八景」四頁。

(19) 耿欣、李雄、章俊華「中国「八景」文化の発展研究概況」、青木陽二、榊原映子編『八景の分布と最近の研究動向』、十七頁。

(20) 青木陽二、榊原映子「八景の伝播と分布」、十二頁。

(21) 張小鋼「浮世絵に映る瀟湘八景——江戸時代における日本人における異文化受容の空間意識」三十九頁。

(22) 青木陽二、榊原映子「八景の伝播と分布」、十三頁。

- (23) 芳賀徹「風景の比較文化史―「瀟湘八景」と「近江八景」、十三頁。
- (24) 石立裕子、綿拔豊昭「日本で選定された「八景」の景物について」、三十五頁。
- (25) 石立裕子、綿拔豊昭「日本で選定された「八景」の景物について」、三十五頁。
- (26) 昭和二(一九二七)年に、大阪毎日新聞社、東京日日新聞社主催、鉄道省後援で「日本新八景」が選定された際に選ばれた、「日本百景」や「日本二十五勝」なども「八景」の一種と考えることが出来る。
- (27) 西田正憲「八景・百景等の風景の定数化と現代における展開」、青木陽二、榊原映子編「八景の分布と最近の研究動向」、三十六～三十七頁。
- (28) 鈴木信宏「東京の八景・江戸八景にみる移ろいとその構造」、青木陽二、榊原映子編「八景の分布と最近の研究動向」、四十八～五十二頁。
- (29) 東洋大学創立一〇〇年史編纂委員会編『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上、東洋大学、一九八八年、三〇八頁。
- (30) 『哲学堂圖書館目録復刻版』、東洋大学附属図書館、一九八五年。特定コレクション目録編集委員会編『新編哲学堂文庫目録』、東洋大学附属図書館、一九九七年。
- (31) 井上円了「南船北馬集第九編」「井上円了選集」第一四卷、東洋大学、一九九八年、七十五頁。
- (32) 井上円了「館主巡回日記」「井上円了選集」第一二卷、東洋大学、一九九七年。
ここでは、明治二三年一二月に、哲学館にたいする寄付を募ることを目的として、滋賀県各地を巡講しているが、講演以外では人を訪ねる記事がほとんどである。
- (33) 井上円了「南船北馬集第五編」「井上円了選集」第一三卷、東洋大学、一九九七年。
- (34) 井上円了「西航日録」「井上円了選集」第二三卷、東洋大学、二〇〇三年、百八十九～百九十三頁。
「図録 東洋大学二〇〇年」(東洋大学、一九八七年)に収められた写真でみると、この邸宅は、石造であるが、当時の白山原町の校舎(現在の東洋大学白山第一キャンパス)と同じ、チューダー様式の建物である。
- (35) Google Mapでバーリーを調べると、バーリーはリーズ市の北西数キロの場所にあり、市街中心地とは、リーズ大学を挟んでいる。現在では、リーズ市の都市部分の広がりにより、都市周縁部となっているようである。(http://maps.google.co.jp/maps?二〇一一年一月十日閲覧)

- (36) 井上円了「南半球五万哩」『井上円了選集』、第二三卷、東洋大学、二〇〇三年、四百三十〜四百三十二頁。
- (37) 『井上円了選集』の解説は、「落葉」が「落陽」と誤植があり、秋の落ち葉が美しいという詩の風情とそぐわない。
- (38) 青木陽二、榊原映子編『八景の分布と最近の研究動向』、百九頁。
- (39) 井上円了「日本周遊奇談」『井上円了選集』第二四卷、東洋大学、二〇〇四年、三百十頁。
- (40) 宮脇俊三「最長片道切符の旅」、新潮文庫、一九八三、四六頁。
- また、国泰寺は昭和五十八年に選定された厚岸町の観光十景の一つとして選ばれている。
- (41) 青木陽二、榊原映子編『八景の分布と最近の研究動向』、百八頁。
- (42) 井上円了「日本周遊奇談」『井上円了選集』第二四卷、三百二十七頁。
- (43) 青木陽二、榊原映子編『八景の分布と最近の研究動向』、百二十六頁。
- (44) 井上円了「日本周遊奇談」『井上円了選集』第二四卷、三百二十五〜三百二十八頁。
- (45) 東洋大学創立一〇〇年史編纂委員会編『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上、東洋大学、一九八八年、三十二〜三十三頁。
- (46) 東洋大学創立一〇〇年史編纂委員会編『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上、東洋大学、一九八八年、三十二頁。
- 東洋大学創立一〇〇年史編纂委員会編『東洋大学百年史』通史編Ⅰ（東洋大学、一九九三年）、六百七十七頁にも、「ただし内部装飾は四月一日の落成式には完成していなかった。八月にもまだ中途であったという。」とある。
- (47) 井上円了述、井上玄一編『哲学堂案内』、財団法人哲学堂事務所、一九一五年（一九二〇年増補改訂三版）、七〜八頁。
- (48) 円了は「城」とするが、源平の一二〇〇年頃に、和田義盛が、出身地でもない、地頭として補任されただけの土地に城を築くことは、まずありえないと思う。
- (49) 井上円了「哲界一瞥」『井上円了選集』第二卷、東洋大学、一九八七年。
- (50) 前島康彦『哲学堂公園』郷学舎、一九八〇年。
- (51) 井上円了「哲界一瞥」、七十三頁。

- (52) 井上円了「哲学堂の由来」『井上円了選集』第二卷、五百六十頁。
- (53) 井上円了述『哲学堂案内』、二十九〜三十一頁。
- (54) 前島康彦『哲学堂公園』では、これらの漢詩のうち、四番目、五番目、九番目の三作にたいして三十六頁から三十七頁にかけて読み下しがされている。
- (55) 三浦節夫「井上円了と哲学堂二〇〇年」『井上円了センター年報』第十一号、二〇〇二年、五十四頁。
- (56) 前島康彦『哲学堂公園』、三十五〜三十六頁。
- (57) 井上円了述『哲学堂案内』、三十頁、漢詩三番目。
- (58) 井上円了述『哲学堂案内』、三十頁、漢詩四番目。
- (59) 井上円了「南船北馬集第三編」『井上円了選集』第二卷、東洋大学、一九九七年、五百七十九頁。
- (60) 国木田独歩「武蔵野」『国木田独歩 宮崎湖処子集』新日本古典文学大系明治編二十八、岩波書店、二〇〇六年、二十八頁。
- (61) この隅田川は、現在の新岩淵水門で本流から別れる荒川分流の隅田川と、そこから上流の荒川部分を合わせた川であらう。
- (62) 『国木田独歩 宮崎湖処子集』、二十九〜五十九頁。
- (63) 岡田憲久「日本の庭 ことはじめ」、TOTTO出版、二〇〇八年、九十六頁。
- (64) 二〇一〇年五月二十五日に更新された以下のホームページで、動画を見ることができる。
- (65) 新宿区ホームページ URL: <http://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/dept/153000/d010740.html> (二〇一一年一月十日閲覧)。
minzoku/bunka_075.html (二〇一一年一月十日閲覧)。
- (66) 中野区ホームページ URL: http://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/photo_museum/spot/arai-matsugaoka-kamitakada.htm#3 (二〇一一年一月十日閲覧)。
- (67) 新井薬師梅照院ホームページ URL: <http://www.araiyakushi.or.jp/nenkan.html> (二〇一一年一月十日閲覧)。
- (68) 前島康彦『哲学堂公園』、三十六頁。

- (69) 東洋大学創立一〇〇年史編纂委員会編『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上、東洋大学、一九八八年、三十三頁。
- (70) 井上円了「哲学堂の由来」『井上円了選集』第一二卷、五百五十七頁。
- (71) 井上円了述『哲学堂案内』、「道順」。
- (72) 前島康彦『哲学堂公園』、三十五頁。